

人間的自然と道德

——ヒュームにおける道德の基礎づけをめぐる——

矢嶋直規

1 道德論における印象と観念

ヒューム道德論解釈において、ヒュームのいう道德感情が現実を感じられる「実在的な感情」を指すのか、それとも理想的観察者が感じるであろう「仮想的な感情」を指すのかが解釈上の論点の一つになっている。本稿の目的は、この問題の検討を通して、ヒュームのいう人間本性と道德との関係を明らかにすることである。

さて、ヒュームの道德論は通常道德感情学説に分類されている。しかしヒュームは、精神に現われる知覚の事実を出発点として議論を始めるため、道德感情の発生過程に関しては不可知論的な立場をとっている。この点に道德感情の発生源として一種の直観能力や、道德感官を想定したシャフツベリや、ハチソンらの道德感情学説とは異なったヒューム道德感情学説の特徴が見られる。

まず、ヒュームの道德論の立て方を検討してみよう。

ヒュームは道德論の冒頭において、精神に現われるものは知覚以外になく、そして知覚は印象と観念の二種類に分かれると述べ、道德判断が理性に由来するのか、それとも情念に由来するのかという二者択一の問題設定を行なう。ヒュームは次のように述べている。

ところで知覚は二種類に、すなわち印象と観念に分かれるので、この区別が一つの問題を提起する。この問題から道德に関するわれわれの当面している研究を始めよう。それは、われわれが徳と悪徳とを区別して、ある行為について、非難されるべきである、あるいは称賛に値すると宣言するのは、観念によってなのか、それとも印象によってなのか、という問題である（強調ヒューム）。(T456)

そしてヒュームは道德判断が理性に由来し得ないこと

を詳細に論証し、道徳判断は印象に由来せざるを得ないと結論している。ところでヒュームが立てた理性と情念という二つの選択肢は、かれの認識論的前提に由来するものである。ヒュームは人生論の冒頭において、印象と観念の違いを次のように説明している。

人間の精神に現われるすべての知覚は、二つの異なる種類に分かれる。私はその一方を「印象」、もう一方を「観念」と呼ぶことにしよう。これら二つの間の相違は、それらが心に働きかけ、思考もしくは意識の内容となる時の勢いと生気との違いにある。きわめて勢いよく、激しく入り込む知覚を印象と名付けてもさしつかえなからう。そして私は、心に初めて現われる時の感覚、情念、感動のすべてをこの名称で包括することにする。また、観念という言葉で、思考や推論の際の勢いのないこれらの心像を示すことにする。：印象と観念とのこの区別を説明するのに多くを語る必要はあまりないと私は思う。だれでも、感じることを思考することの違いは自分自身すぐに気付くであらう。

(T1)

道徳判断は知覚の一種である。従って、「すべての知覚」が「印象」と「観念」とに分類されるとするならば、道徳判断もそのいずれかに分類されることになる。こうしたヒュームの論述は、道徳論が知識論と同一の認識論的立場で考案されていることを示している。

ここで明らかになったことは、ヒュームによって道徳判断が「印象」によるものであるとされたのは具体的に道徳判断を行なう主体としての道徳感情を積極的に論証した結果ではなく、いわば消極的な選択の結果であったということ、さらにヒュームは「印象」という用語にきわめて広範な含意を持たせているということである。そして、理性がその選択において棄てられたのは、もっぱら、理性が因果的効果を持たないという理由によっている。道徳判断は人間の行動や情念に影響を及ぼすものでなければならぬというのがヒューム道徳論の最も根本的な前提である。

ヒュームが道徳判断に果たす理性の役割を限定することに力を注いだのは、ヒュームの道徳論が、ウォラストンの理性主義的道徳学説の論駁を主たる目的の一つにしていたという事情による。しかしこうした論証方法の故に、道徳感情がいかなるものであるのかは十分に明らかにされているとはいえない。ヒュームは、道徳感情を

その他の感情とわずかに感情という名称を共にしているというだけのある特別な感情とみなし、それ以外の感情との違いは、ちょうど音楽の快と食べ物の快が異なった種類の快であることが明白であるように、だれにとっても明らかであるという。そしてヒュームは道德感情が「ある特殊な感情」であるとしながらも、それを次のように説明している。

それゆえ道德性は、判定されるというより、一層適切には感じられるのである。もっとも、この感じまたは心持ちは、普通にはきわめて柔らかく温和(soft and gentle)である。そのため我々は、類似のものをすべて同じものとする普通の習慣にしたがって、ともすれば道德性の感情または情念を観念と混同しがちなのである。(T470)

ところで、こうした「柔らかく温和」な情念は明らかに『人性論』第二巻で説明されている「穏やかな情念」に対応するものである。『人性論』第二巻においてヒュームは次のように述べている。

厳格な哲学的観察眼をもって物事を検討しない人は、

異なった感覚を与えもせず、感情や知覚と直接に区別できないような諸々の精神活動を、全く同じものだと思ってしまうのも当然である。…従って一瞥して外見から物事を判断する人々は、同じように穏やかで平静に動いている精神活動全体を理性と混同することになる。

ところで、確かにある種の穏やかな欲求と傾向があり、それらは本当に情念ではあるが、精神に情動をもたらしことなく、直接の感情や感覚よりはその結果によって知られるのである。(T417)

これ以外にもヒュームはいわゆる「理性」とされているものが、「情念の一般的で穏やかな決定にはかならない」(T 583)と述べている。これらを考えあわせると、ヒュームのいう道德感情は『人性論』第二巻で述べられている「穏やかな情念」に対応するものと考えられる。もっともヒュームは、観念と印象が区別できなくなるようないくつかの例外的な場合が存在することを『人性論』のいくつかの箇所において明言している。さらに、ヒュームのいう感情とは、連合心理学の原理の基づいて変化するものであるから、「穏やか」であることが道德感情であることと条件であると考えることはできない。しかし、

道徳「感情」についてこのような基本的な定義においてヒュームが、道徳「感情」を、ともすれば「理性」と区別し難いような「柔らかく温和」な感情と説明したことが、道徳感情をめぐる解釈上の混乱をもたらす一因になっていることは疑いない。

ただしここで確認しておかなければならないことは、ヒュームにおいて理性という概念は、観念相互の関係を扱う働きというヒューム独自の認識論的枠組みにおいて定義されている意味でのみ用いられており、私たちの日常の言語使用において理解されている意味においてや、あるいはカント的な意味において用いられているものではないということである。従ってまた、道徳論において批判されている理性もヒュームによって限定された意味での理性にはかならない。

2 一般的観点

ヒュームは道徳感情が「理性」と区別し難い「柔らかく穏やか」な情念であると述べているほかに、現実の感情が必ずしも道徳判断に対応するとは限らないことを認めている。またヒュームによれば道徳判断は、個人的な状況、あるいは一時的心理状態に由来する偏り避け「不変で一般的観点」に立って下されるとされる。彼は

次のように述べている。

ある性格が自己を道徳的に善、または悪と呼べるような感じまたは心持ちを引き起こすのは、その性格を我々の特殊利害との関連なしに一般的に考察する時だけなのである。(T172)

個人的な状況に由来する矛盾を避けて、物事に関するより安定した判断を行なうために、私たちはある不変で一般的観点を決め、私たちの現在の状況がどのようなものであろうとも、いつも自分自身をその一般的観点に置くのである(強調ヒューム)。(T582)

周知のようにアダム・スミスはその概念をさらに発展させて、「公正な観察者」として定式化し、それを彼の道徳哲学の主要な概念として用いている。またそうした形でヒュームの一般的観点を発展させたのはアダム・スミスばかりではない。道徳的規範を導出する方法の定式化が、近代以降の道徳哲学・倫理学の主要な課題となり、普遍性を道徳性の要件と主張する哲学者は、しばしばヒュームの一般的観点をその代表例として援用してきた。例えばジョン・ロールズは次のようにいっている。

ヒュームやアダム・スミスを思わせる次のような定義を考えてみよう。ある事柄、例えば社会システムが正しいとされるのは、ある理想的に合理的で公正な観察者が、その状況に関するあらゆる重要な知識を所有するとした場合に一般的な観点からは認するであろう時である。

『正義論』 p.184)

ロールズはヒュームとアダム・スミスの道徳論を同じものとして扱っている。もちろん、ロールズはここでヒューム解釈を提案しているのではないし、ロールズ自身は体系における「一般的観点」の位置付けはヒューム解釈とは別の問題である。しかし、この解釈はヒュームにおける道徳感情の意義付けをめぐる解釈の一つの典型であると考えられる。この解釈はヒュームのいう道徳感情を実際に感じられる感情ではなく、理想的な観察者によって一般的な観点をとった時に感じられるであろう「仮想的な感情」と見なす。先に述べたようにヒュームは道徳感情と現実の感情の厳密な対応関係を否定しており、そのことがそうしたヒューム解釈の主要な論拠とされている。だが私にはこうした解釈は、適切なものとは思えない。そうした解釈において、ヒュームの「一般的観点」は、

ヒューム自身の思惑を越え過大に拡大解釈されているように私は思う。というのも「仮想的な感情」は、ヒュームの考える感情の定義に照らして形容矛盾であり、なによりもそうした解釈は、道徳の根本的な要件を因果的な観点から捉え、人間をつき動かす因果性を有することと考えたヒューム道徳哲学の根本的な前提に適合しないからである。

『人性論』の文脈から明らかなように、ヒュームが「一般的観点」を持ち出したのは、時代や場所の隔たりによる道徳判断の「矛盾を防止して、ものごとのさらに安定した判断に達するため」の方法としてであった。

「一般的観点」はそれだけによって道徳判断を可能にするような道徳判断の根本的前提ではなく、むしろ道徳感情が偏りのない形で現われることを可能にするための補助的な手段として位置付けられているに過ぎない。

またヒュームにおいて「一般的観点」を取ることは、他者との想像上の立場の交換を可能にする手続きと考えることもできない。というのもその場合、道徳感情は自己のものではない、別の個人のものに取って代わられるだけであって、それは依然として「個人的な状況に由来する矛盾」から自由なものとはならないからである。ここにアダム・スミスの「公正な観察者」や、現代倫理学

でいわれる道徳判断の普遍化可能性とヒュームのいう一般的観点との違いがある。ヒュームにおいて道徳の普遍性が求められるとしても、それは各々独立して存在する諸個人の共通項をまとめて挙げることによって得られるものではないのである。

それ故、「一般的観点」から「理想的観察者」道徳論への発展は、ヒュームにおいては本来禁じられていたとも考えるべきである。ヒュームにおける道徳判断は、あくまでも「普通の人間」によって、ただ妨げない条件において下されるものでなければならなかったのである。

さらに「公正な観点は」「一般的観点」と明確に区別されるべきものである。というのも先ず始めに「公正」とは何かが問われなければならないのであり、道徳判断を「公正な観点」からなされたものと定義することは論点先取にほかならないからである。

ヒュームの立場では、道徳判断は一般の人間からかけ離れた「聖人」——たとえば、一般の人間が持つような自己の福利に対する配慮が極度に薄く、人間の行動の直接的な関心対象である物質的所有、社会的承認の欲求をほとんど持たない人物——の視点からなされるものであってはならないとされる。ヒュームはそうした道徳判断を『道徳原理探究』において「僧侶的美徳」として批判し

ている。(B270)

ヒュームにおいて人間本性といわれる時の「人間」は個々の人間を越えた類的な次元で捉えられている。このことがヒュームが『人性論』第一巻でおこなっているパクリー的な精神の実体的理解に対する批判の積極的な意味である。と同時に精神の実体的理解の否定は、共感に基づいて可能になる人間のあり方を基礎付けるための理論的準備でもある。人間は「印象の束」であるからこそ、それぞれが各々のもつ印象を伝達しあいながら全体として一つのまとまりをなしつつ存在し得るものとなる。道徳とはこうした人間の類的なレヴェルにおける自然的な存在の仕方なのである。

従って道徳は奇特な個人の特性ではなく、本来だれにとっても可能なものである。また、そうでなければ道徳は現実の人間の行動に影響を及ぼすものではありえない。たとえば、「理想的」な道徳判断が下されようと、それが人間本性に適合しないならば他者との道徳的連関の原理である「共感」を引き起こすこともなく、人間の行動の原理としては無意味なのである。ヒュームにおいて、道徳判断はあくまでも、あらゆる人間が本来共有している原理に基づくものでなければならぬとされるのもそのためである。道徳的に正しいことはそれ自体で価値の

あることではなく、人間本性を前提にした適切なあり方ではない。またヒュームにおける道徳性の基準はあくまでもこうした「人間本性」であり、それ以外に道徳的卓越性を測る尺度は存在しない。

3 人間的自然と道徳

ヒュームのいう人間本性の斉一性とは、すべての人間が一つの道徳的問題に対して同一の道徳判断を下すことを意味しない。そのようなことはそもそも考えられないであろう。人間本性の斉一性とは、あらゆる人間が、およそ人間的である限り善悪（徳、悪徳）の知覚を根拠にして行動しうる素質をもつものであり、またそうした善悪によって判断される対象でありうるということを意味する。またそうした道徳性の領域の全体が「物質的自然」や「動物的自然」と区別される「人間的自然」なのである。そのような人間的自然が、人間の本性として存在するというところこそヒュームの主張である。ヒュームは徳も悪徳も「奇跡」と反対の意味において自然的であると述べている。奇跡が存在することが驚異なのではない。そもそも奇跡はなんらかの調和的な秩序を前提とすることなしには考えられない。それゆえ奇跡を考えることを可能にするような秩序が存在すると主張することは哲学

的な課題となる。ヒュームの独創性は、こうした人間的自然が存在するという主張によって道徳を哲学的に基礎付けたことにある。しかもそれが「自然」であることによって、経験論的に最も堅固な基礎付けとなりうるのである。

ヒュームの道徳論は第一義的に善についての考察を主題とするものではない。ヒュームは「徳も悪徳も同じように自然的である」(T84)と述べている。ここでいう自然的とはいってもなく「人間にとつて」自然的だということである。従ってヒュームにおける道徳とは、徳、悪徳（善、悪）という基準で理解され、またそれによって左右される人間行為の全体を指している。それだからヒュームのいうHuman Natureは、道徳論においては認識論的な地平に現われる狭義の知覚を意味するものだとだけ理解することは適切ではない。むしろヒュームの功績は、「人間的自然」という概念によって、人間の道徳的世界の全体を基礎付けた点にこそ認められなければならない。

ヒュームのいう「人間本性」の特徴は、現実と理想（道徳的規範）を二元的に捉える理想主義的な道徳論と対比して考えると一層鮮明になる。つまり、理想主義的な道徳論が、到達すべき目的として、道徳的規範を現実

の彼方に想定するのに対して、ヒュームのいう道徳的規範は、人間にとっていわばその皮膚の下に存在しているものである。それは文字通り「人間的な自然」であって、現実と無関係に存在する諸観念相互の関係を取り扱う能力である「理性」による妨げもなく、または病的な意識障害などの存在しない状態で最も純粹な形で現われるものと考えられている。ヒュームは、私たちの基本的な道徳的概念が人間的な自然（人間本性）に由来することを示しているのである。

4 結 び

ここで、ヒュームの道徳判断が現実の道徳感情を前提とするものか、それとも一般的な観点をとった時に考えられる仮想的な感情によるものかという問題に対する一応の回答を提示したい。

ヒュームのいう道徳感情の实在性の定義は、道徳的な意識が知覚に現われていることである。すなわち、いかなる形であれ道徳判断が下される時ヒュームのいう道徳感情は实在するものと考えられる。静かな情念といわれるものはその判断自体を意味している。

私たちは通常自己と疎遠な他者の行為に関する道徳判断を行なうさいには現実の感情と道徳判断の一致を認め

ることが多い。しかし自己、及び自己と親しい関係にある人々の利害に反する道徳判断に関しては両者が対応しないことも稀ではない。だがこの場合にも、道徳感情が現実の感情と厳密に対応していないということの意味は、道徳感情が現実の感情として存在しないということではない。それは単に、道徳感情の他に、もう一つそれとは別の感情が存在することを意味しているに過ぎない。道徳感情はそれ以外の感情とはっきりと区別されるとヒュームがいう時、こうした道徳感情の存在のありかたのことを述べているものと理解することができる。私たちが道徳的当為の意識をもつことが、道徳的に動機付けられていることの必要十分条件である。それ故、人性論第二巻において論じられている情念の分類においては、道徳感情はどの特定のカテゴリーにも当てはまるものでもないといわねばならない。

ところでヒュームのいう道徳的世界の秩序は道徳的に望ましいことのみが行なわれることによって維持されるものではない。ヒュームの考える道徳的世界とは、道徳的に望ましいことが行なわれる傾向があるだけでなく、道徳的に望ましくないことも行なわれ、かつそれが道徳的に非難されることによって社会的文脈にフィードバックされる過程全体のことを指している。ヒュームの道徳

論が天上的世界を描いた形而上学ではないことの意義はこの点に見出される。これは経験論者ヒューム道徳論の長所であり、それ故に社会哲学や正義論の基礎付けに直接結びつくものとなり得るのである。

ヒューム『人性論』を貫く哲学的視点の特徴は、原因と結果の観点から世界を解釈すること、そして原因結果の関係が普遍的な法則であるとする説に対する批判にある。そしてこの視点は「道徳論」においても揺るぎなく一貫している。そのためにヒュームは原因性を持たない理性を道徳判断の主たる働きから排除し、道徳判断の主体は、因果的効果によって世界を構成しうる原因性を持つ「印象」でなければならないとしたのである。道徳感情とは人間にだけ適用される特殊な因果性のことである。この因果性は、人間に固有の因果性であり、であるからこそそれは「人間的」自然である。しかも、まさにそれが因果性であることによって、因果的に結合した一つの世界を生みだすものとされる。そのような因果的効果によって構成される世界が人間的自然の世界、すなわち道徳的世界である。道徳的世界の本質をヒュームはこのようなものとして描いている。こうした超越性を排した道徳論に経験論者ヒュームの道徳論の特徴を見出すことができる。

文献

ヒュームのテキストからの引用は『人性論』を、『道徳原理探究』を『ロッセルビー・ビッグ版のページ数を記した。邦訳は岩波文庫版、中央公論社版を参照させて頂いた。

Daniel Shaw, "Hume's Moral Sentimentalism" *Hume Studies* XIX (1993) No.1: pp. 31-54

Elizabeth S. Radcliffe, "Hume on Motivating Sentiments, the General Point of View, and the Inculcation of "Morality"" *Hume Studies* (1994) No. 1: pp. 37-58

Harrison, J. *Hume's Moral Epistemology*, Clarendon Press, Oxford, 1976

John Rawls, *A Theory of Justice*, Harvard UP, 1971

(やじま なぎさ・国際基督教大学)